



Title	教育におけるマージナルマン
Author(s)	原野, 利彦
Citation	長崎大学教育学部教育科学研究報告, 42, pp.1-8; 1992
Issue Date	1992-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/30784
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:42:35Z

教育におけるマージナルマン

原 野 利 彦

Education and Marginal-Man

Toshihiko HARANO

A. 問題意識

「個性」尊重は、たとえ「たてまえ」だけが横行することが多かったとはいえ、教育界においては当然のこととされてきた。しかし最近のそれは従来とは若干趣を異にしているようである。つまり中心的価値への求心力よりも、周辺的もしくは異質的価値への遠心力を重視するかの如き文脈において「個性」に関する議論が行われているのである。勿論、教育上の議論である以上、分散よりも統合に力点が置かれるのは当たり前であろうが、それにしても一見すると分散や解体を尊ぶように見える諸議論が多いことは如何なる意味を持つのであろうか。これが小論の問題意識である。

B. 既存の解釈図式の破綻

我々は何らかの解釈図式に基づいて生活している。そしてメンバー相互が理解し合うにも充分なまとまりや一貫性のある図式を持っている。そしてそれがめったに反証が見出されない限り、その図式を自明なものとみなしている。これらの図式はその社会の先人たちが使いこなしてきたものとして、また同時代の人々が当然だと思っているものとして、信頼されており、新しいやり方の工夫をする面倒を省かせてくれる。しかし権威があり便利でもあるその図式の存在は、新しく検討しなければならない問題まで既存のやり方で処理してしまう結果をまねくことが多い^①。正確に言えば、既存の図式は新しい事態と古い事態とを区別する基準を提供しえない。

我々の日常化された場においては選択的行為、つまり物事の重点の移動、方向の転換などが自分の動きに合わせて殆ど無意識裏に行われる。これらは何世代もかけて練り上げられてきた「メンタルモデル」は、習慣として我々に装備されているように見える（習慣は蓄積されたものと見なされることが多く、断絶は意識されないのが普通である。）この「～の場合はどうするか」という事態に自動的に重みづけをしつつ生きることが出来る装置としての「メンタルモデル」は、ある程度具体的な時間や場所から独立した固有のものとして働く。「主体性」という観念もこの装置の一つである。それは情報の再構成とか問題解決という行為の集積、蓄積の場として働くものとされている。

このように自明と見なされる解釈図式に安住しておれるのは（シュッツによれば）次のような場合である。第一に、一般的に言って問題の起こり方も、それが解決されるあり方も、従来と同じ様相を持つという仮定がある場合。第二に、指導者や両親から伝達された図式は根拠が示されないでも信頼できるという仮定がある場合。第三に、具体的な問題に直面したときでも、より広くより深い検討をしなくても、使い慣れた手元の解釈図式に従っ

ておれば充分だという仮定がある場合。第四に、社会の大多数がそのようなやり方で問題にうまく対処していると信じられている場合^②。

では既存の解釈図式に安住しておれなくなる場合とはどんなものであるか。それはルーマンが言うような世界の「複合性」(Komplexität)が自覚される場合である。彼の表現を借りれば、我々が行為し、体験している出来事は一つの現れに過ぎず、「具現される体験や行為以外に、より多くの体験や行為の可能性が常に存在する。」つまり我々は直接に体験していることとそれを越えた可能性としての体験とを同時に生きている。こういう複合した世界に居ることをことさらに自覚させられる方向へと追いやられる場合、人は既存の解釈図式に安住しておれなくなる。

これは世界の複合性という不確定なものをシステムの問題に変換することが困難である場合であると言いつつも出来る。激変する状況において、様々な出来事を同時的に自分のシステムの存続や改変のために翻訳することが困難な場合である。既存の先行的選択形式である構造化した処理方法に依存しているだけでは状況の変化に対応仕切れない場合がある。要約すれば新しい構造と行動をコード化するための情報を編み出すことが困難な場合である。

この時、人は既存の解決法に頼ることに自信を失うだけでなく、この現実の多様さに目覚め、その隙間に気付きはじめる。そしてそれを通じて垣間見られる現実を越えた、向こう側の「他の現実」らしきものを捉え、より複合した世界を構成し、秩序感覚を取り戻そうとする。つまり人々は危機や不安が既存のものの見方に閉じ込められることに起因すると考え始め、「現実」の狭苦しさを感じ始める時、「他の現実」へ超越する事を願う。たとえこの「現実」を越えられないまでも、それに耐え得るように意味をつくり、現実に活力を与え、支えとなるような超越的諸力を構想しようとするのである。

この場合次のような対応が図られる。(1)なんとかして世界の複合性という不確定なものを「現実の変革」というシステム変革の問題に変換しようとする。(2)システム変革の問題に変換することを目指さず、外部の世界をも含み込む、より広く複合的な世界によって秩序回復の感覚を取り戻し、既存のシステムに耐えようとする。(3)システム変革の問題や、より複合的な世界観の回復というものを目指さず、これらをも絶えず不確定にし、揺り動かそうとして「外」を志向し続ける。つまり如何なる「現実的」解決法に呑み込まれず、その外側へと逃亡し続けようとする。

(1)(2)を見ても分かるように「現実世界」の吸引力は凄まじい。しかも「リアルな」世界に閉じ込めようとする方途は無限にある(俗に言う「現実から逃避するな!」という説教から始まって。) (1)の例として「現実の改革を目指す」という種々の「改革主義」や「進歩主義」がある。(2)は「浄土」や「ユートピア」などの別の世界の構想である。人々はこの別の世界の吸引力を夢想し、現実世界の厳しさに対する慰めを手にいれてきた。このような試みは現代においても存在する。かつての人々が宇宙的な万物照応の感覚のなかに生きようとした願望を、様々な宗教や呪術的行為(たとえばミニ宗教やオカルトブーム)などによって果たし、現代の迷宮的世界に生き残ろうとする試みである。「子供の宇宙」を尊重せよという教育的見解もその一つであろう。つまり「まずこの世が存在し、次いでより高い価値を持つ現実としてのあの世(もしくは第二、第三の現実、<異界>、深層の

世界等々)がある。だからそのような世界を夢見ることによってこの世の生活を豊かにせよ。」という図式が子供の教育の世界にも提供されるのである^⑧。

だがこのような約束の地の図式は虚妄にすぎないのではないかという疑問も起こる。なぜなら「この現実」と「彼の現実」などと領域を区別する境界が不明確であるからだ。境界が不明なこと、つまり物事が明確でない場合、この領域の区別の上に立つ複合的世界像などの図式を拒否する意識を選ぶ方が、たとえ「不幸の意識」にすぎないとしても、紛い物の「約束の地」を目指す意識よりましではないか、という疑問を起こさせる。つまりこの世から締め出されて、他の世界に定住するとかいうことをはなれて、如何なる拠点をも拒否すること、つまり荒野を彷徨うこと……このような姿勢にある者は、現実の変革や、より高い現実によってこの世の中に適応していこうとする試みが手近かな目的や、性急な献身という虚妄にすぎないのではないか、という疑問にとりつかれるのである。

従来、「アイデンティティの崩壊」とか、「ホームレス・マインド」,「共同体の絆の弱まり」,「合意や共感の亀裂」,「ディス・コミュニケーション」などと言われてきた事態に対して、アイデンティティの回復とか共同体の復権、家庭教育の回復、などというスローガン提起されてきた。しかしこれは上で述べたように、「約束の地」という虚妄によって、現実の亀裂を糊塗したり、何かのアリバイをつくることではないだろうかと疑ってみることもできる。人は如何なる「絆を求めるスローガン」に対しても、絆とは無関係で異質の要素を自らの中に持ち続けることを悟らざるを得ない。もし、近代個人主義の特徴である自分自身の中にこの「違う」という意識を持ち続ける人々が多数派を占めるようになれば、以前のように絆を壊し兼ねない人物を外敵として排除するだけではうまくいかなくなる。

近代においても、一つの宗教、一つの理念を中心とする社会を夢想することもあった。しかし、現代では世界への参加の仕方が不透明になっているし、新しい共存の可能性が問われている。それはソ連邦が崩壊し、新しい連邦が模索され、ヨーロッパ連邦めいたものが試みられている今の状況を見ても分かる。しかも現代人は個の違いを頑固に守り通す姿勢を明らかにし、如何なる平均化へも抵抗しようとしている。近代的個人主義は愛国主義的、全体主義的な「異物排除」をもたらしたと同時に、平均化を拒む「異邦人意識」も生み出している。勿論、バラバラになった意識に恐怖し「絆の回復」「主体性の回復」を声高に叫ぶ者が教育を語るという事態は依然としてある。「絆の回復」「主体性の回復」の主張こそ平均化と異質性の忘却の試みにすぎないのではないかと疑ってみる必要があるにもかかわらず。

C. 周辺、境界、異次元の意識を奨励し始めた学校教育

最近、教育界においてこの「絆の回復」「主体性の回復」を叫ぶ代わりに、個々人の「異質性」や「少数派の感性」……いくなれば「辺境意識」とでも言うべきものに価値を置く風潮が出てきた。近代的な画一教育を脱して、個性の重視、子供の深層の理解などが教師に要求されている。一般社会でいう「脱サラ」などのように、「並みの人間からの脱却」ということにも類している。しかしこの方向自体が、新たな管理ではないかという疑問も起こってくるのである。教育界に向かって放たれる諸々の批評は、子供たちをトム・

ソーヤーのようになるように育てよと言っているように見える。子供たちが自分の生活に風穴をあけることができるように彼らの深層を理解したり、従来の教育的観点から見れば取るに足りないような周辺の経験にも目を向けよというのである。要するに人並みを目指す教育であってはいけないと言われているのだ。優等生臭い子供達の大量生産をもって教育だとする考えはもう古いと言われる。非合理的思考を排除する訓練だけでは教育の「荒廃」を救う道はないと主張され、ノンセンスが奨励される。「犬の首輪—ただし犬はそのなかに入っていない。片目の猫—このように役に立たない呪いの道具の数々」のノンセンスを子供の頭に回復させよというわけだ。たとえその「場所・舞台」がミシシッピー川ではなく、学校・学級であっても異質性を育てることが大いに奨励される。それは決して教育的統合を壊しはしない。なぜならI. イリイチの言う「学校化された社会」の状況が全社会化しているから。つまり社会全体が学校化しているから、学校から子供をある程度解放しても学校的統合はいつでも可能だというわけである。

このようにして今や学校文化の枠内で安心して「規格品」を軽蔑し、個性ある風貌をつくり出す「個性的な」生き方が推奨され始める。平均的な「顔つき」や外見や雰囲気は軽視され、「外のしるし」を内側に刷り込んだような者が魅力あるものとなる。「自分史」などという「語られ得る」歴史は勿論、語られ得ないリズムをもつ外貌が喧伝される。要求されるリズムとは一つ一つが「見出された時」になるように、異質な時間系同士が互いに他を圧縮しあって結合しようとする迅速な時間感覚である、と言われる。それは論理的抑制や言語表現の冷静な厳密さと両立され得るものであり、素早く回転し、時間・歴史を不断に分割するものへの要求である、とされる。

それはまた、定住と逃亡の「境界」にある雰囲気への要求でもある。安定はかりそめのものだという諦念を漲らした者の魅力が語られる。永遠の過渡性を持ち続けることの奨励。しかしながらどういうわけか、これは定住を意味するはずの目的や予定を建てる事と両立するものとされる。あくまで「国際的舞台で優雅に移動するビジネスマンや芸術家」のようにスケジュールで多忙さをこなしていく者でなければならない。もし目的や予定をなし崩しに消滅させるような流滴の雰囲気を持つ者は治療の対象とされる。だから「境界を越える」行為も、微妙な心理的な壁の揺れという次元にまで矮小化されざるを得ない。微妙なニュアンスを表現する「顔の表情」が大きな問題のように扱われ、相手に対する心理的操作の道具になる。野球の実況中継でさえスポーツを監督や選手の表情を写しだす心理劇になった。このように越境の冒険は現代では統計学的勝利を目的にして勘定高くなっている顔の表情という心理劇にまで矮小化されているのである。生死を賭け、復活を巡る境界意識にはほど遠い。

D. 流滴は忍従の外面である無関心の甲羅をつくる

だが、絶えざる移住の雰囲気は目的スケジュールの行為と調和するものだろうか。たとえば、学業成績で分類される子供の場合をとってみても、彼らはまさに漂流や流滴の状態を味あわされる。この流滴は屈辱的な地位を被らせ、子供の忍従の外面（甲羅）を強化する。しかしこの外面の影で批判的な心理が発達する。目的に向かって予定を立てて進んでいる人間の単調さが彼らには見えてくる。彼らは管理社会の人間が単一化された世界にしか住めないのに、自分は複合的世界に生きており、複眼的思考が出来るという気分を味

あう。なにしろいつも深刻な選択に迫られ、断絶を感じ、策略を以て生き抜かねばならず、日常的な惰性或休息が危険であるような者にとっては、自らが荒廃してしまわない限り、事件のない事態は生命的でないという感覚を見つけてしまいますからだ。

しかしすっかり荒廃した人間と、荒廃を奥に潜ませながら、事件の中でのみ生命を感じる者の区別は難しい。なぜならいずれの者も表面は無関心の仮面で鎧うだろうから。この「無関心」の形を取った甲羅によって子供は傷つかないように、痛みを感じなくて済むように自分の奥深くに引き籠もってしまい、一切の感情、感傷から手を引く。いつも仲間と群れている教師たちの手の届かぬ高みに立ち、理解不可能な存在になることも出来る。

このような事態に対して「子供の宇宙」を尊重せよとか、「生活に異次元の回復を図れ」などの主張はどれほどの意味を持つであろうか。もはや子供たちはそのような「約束の地」を信じるほど甘い状況下にはいない。あるのは宙ぶらりんの状態だけである。彼らは根を下ろせなどという説教などを受け付けない。「根を下ろすべき大地」も実感できず、まして「向上すべき天空」も見えない。何が上で何が下かという空間的秩序や、何が成長で何が退歩かという時間的秩序づけが出来ないからである。要するに、物事を区別し位置づける境界をはっきりしないし、いい加減であるとしか見えないからだ。彼らは果てしない移動の途中にある人間である。絶えざる選択、断絶、策略を必要とする者にとっては、生と死、復活の時間だけがある。モラトリアム人間、もしくは難を免れたという実感のなかにのみ生きる人間として現代の子供たちは存在する。

E. 学校における「異質的時間」への対応の限界

学校という装置はこの甲羅をはねのけ、このような「異質的時間」に対応できない。ただ「無気力だ、三無主義だ、無関心だ」などと非難し嘆くのみである。「各人のリズムを大事にする授業」などと「異質的で局所的で多数化された時間を目指す」とされる指導も疑似的なものである。それはスケジュール化できる範囲内での異質性の奨励でしかない。学校という装置では新しいトポス、重層化された多数の、回帰的トポスなどを思考することは不可能である。

今や子供や若者の中には、単線型合理性を押しつけてくる統一世界へ適応しつつも、果てしなく逃亡していく要素がある。彼らは近代の重圧を「近代化を目指す」ことによって跳ね返そうとするアジア諸国や、ソ連・東欧・中東の紛争地域、またヨーロッパの統合などの動きには問題設定のモデルを求めない。それよりも少数民族問題や先端の電子工学や脱近代のイデオロギーなどが混在するアメリカ西部・南部の文化から刺激を受ける。日々の決まりきった学習を要求される彼らは、それと絶えず戦ったり、逃亡したり、妥協したりしながら川のように曲がりくねった境界線を描きながら生きる。だから、トム・ソーヤ的両義性が再登場したものと勘違いされる面も生じ、教師に児童の宇宙を大事にしなさいと勧める理論も現れたりするのである。

幾つもの境界を越える度に経験する苦痛は時間を浮遊させる。それはかつての被抑圧者がしたような蓄積された内容に満ちた抗議ではない。なぜなら境界そのものが不明確なもだから蓄積の仕様が無いのだ。そこには空虚だけがある。しかしその空虚さも多様な質の仮面の奥に隠されている。それは「仲間」、「同胞」を捏造し、保護し・歴史化する近代的シンボルに逆らう。彼らは先の見えない暗黒の世界から、死、空白、光の交錯の中から、

定立をずらし、隙をみては解体を図る。しかし彼らは内心高みに立ち、スケジュールの奴隷たちを嘲りながらも、スケジュール的労働の産物を享楽する術も心得ている。

近代の産物である技術システムを使いこなすことを願いながらも、それを嘲笑う「異邦人」。自分の滑稽さ・嬌小さを自覚するなかから生ずるとす黒い哄笑。この半端さから来るエロスのドタバタに満ちた近代的な学校。この半端な解放と半端な抑圧が心身の病を引き起こす。学校にも方位を決め場所を選定するシンボル体系はなく、浮遊だけがある。

しかし彼らは単なる「異邦人」であるだけでなく、「本国人」でもある。これを比喩的に言えば、本国人が外国人を「労働者の受入れ問題」とのみ捉えるやり方に対応する⁹。それは外国人を「途上国」から「雇用吸収力の強い先進国」へとプッシュされて来る人々としてのみ理解する近代特有の見方である。事実、労働許可証は外国人にとって無上のものとなっている。彼らは労働者として規定されたり、自らをこのように規定する努力をするからこそ、「外国人」なのである。現代では「先進国」の国民は自分をもはや労働だけに縛られる存在ではなく、「遊び感覚」を大事にする者と思い込んでいる。だから彼らは我々とは違う「労働者」であり、だから「外国人」なのである。しかし本国の子供たちも「労働許可証である入学許可証」を入手するために懸命に勉強する「外国人」でもある。だが「本国人」でもある彼らは、労働者である「ダサイ」「クソまじめ人間」を嫌悪する。「ネクラ」で「オタクキー」が排除される。本国人兼外国人、つまり半端な異邦人はますます姑息な人間性に落ち込んでいき自己嫌悪に陥っている。

F. 迷宮は Simulation 化出来るか？ Simulation 化された「地平」

現代社会の変化の激しさは、人が自分を「位置づけ」ること、つまり或る地平を採用すること、アイデンティティを探ることを困難にする。世界の中心が分からなくなり、方向性、方位への予感、足場を持ってなくなる。つまり世界を理解＝understand することができなくなる。このような方向性喪失は自動車や高速運搬機関による移動の常態化を見ても分かる。抽象化され、等質化された時空は通信網、道路網として自律的に運動し、人や地域は山や川、諸々の仕事の場という具体性方向性を失われ、機能的な「矢印、方向指示」に従属させられる。世界が迷宮化し、我々はこれを彷徨うことになる。

こうして「参加」は幻想となる。なぜならば、統合の方向と正統性が絶えず変転し、自分が日常的自我へ閉じ込められているのか、それともそれから脱出しているのか、ということが不明となるからである。差異や境界が不明瞭な時、我々は同じ所を堂々巡りしているのか、それとも別の場所にいるのか皆目見当がつかなくなるのである。「未来を目指す教育」や所謂「ライフ・サイクルを発見する」ことも単に機能的な同質性の中を蠢くだけなのか、それとも異質の時空をも含み込んでいるのか、これも明確ではない。

こうして個人や集団、地域のアイデンティティは絶えざるスクラップ&ビルトされる記述空間に還元され、終わりのないシュミレーションを繰り返す自己反省の単位となっているように見える。そして、それらは単なる機械的で機能的な組織網ではなくなり、演劇的な多様なシナリオの組合せの展示の時空間となっており、消費者の動向によって多様に変容し移動する蜘蛛の巣の如きものとしてある。

感受性や知覚の変動は境界(域)の変動を意味する。だが境界そのものがぼんやりとしているため、境界の集積としてあるはずのこの世界の変動が不明確なものとなっている。

つまり自明性そのものの変動がはっきりしないのである。当然なのか、それとも異常な出来事なのか曖昧なままである。だから、たとえば昔のように火、水、風、山、石、川、血、墨などが日常性を越えてあの世からの誕生やあの世への送り届けを確認するための演技の道具であり、人生をしっかりと繋ぎ止め、方向づけるためのシンボルであることも出来ない。自動車の騒音は農村社会における初をつく白の音のような、神をも慰め喜ばしたリズムの代わりをすることはできない。楽器と道具とが峻別された世界に我々は取り囲まれており、普遍宗教が成り立つリズムの世界は失われ、すべては境目のはっきりしない朦朧とした世界のなかに浮遊している。

勿論、現代の我々も現実の多次元性を捉えようと様々な提言試みられてはいる。深層とも通じる素早い多次元的思考である象徴的思考を取り戻そうという主張もある。たとえば「命名」の工夫がある。子供の命名は勿論、お菓子やコンピューター・ソフトの命名にまで工夫に工夫が重ねられる。このような努力は新しい意味の発見、創造に役立つとして推奨される。記憶時の変形や取捨選択、また想起時の再構成がアルゴリックな「完全な復元」ではないという「理由」によって。

G. 教育での「異質性」尊重とは「境界の演出」の勧めである

このように深層を組み込み、異邦人的要素を組み込むやり方として「境界の演出」がある。移動や旅は「境界」の両義性に満ちた原始的緊張をもたらすというわけだ。境界は人的、物的、文化的交換のみならず、それらと一体になったリズムの交換の場でもある。だからそれは既存の枠組みに安住する者たちを揺さぶり、その分節法を変える。また境界は極度の精神的緊張の瞬間・集中の場でもある。境界といつも関わりを持つとされている「制作」や「修行」、つまり芸術的・宗教的活動における境界の演出法を学ぶことが推奨される。また事実、旅行はブームであり、ミニ宗教集団は簇生している。

だが現代では（上で述べたように）境界そのものが不明確なのだ。朦朧として、白か黒かはっきりしない灰色（灰色高官）。旅をしているのか、それとも同じ所をぐるぐる回っているのかははっきりしない。だから境界から境界へ本気で彷徨しようとする者は、切れぎれの断片として、時たま薄ぼんやりと姿を現すことしかできない自分に苛立つようになる。散らばった断片をいろいろ組み合わせるとは、また崩さざるを得ない探偵のように、自分を組み立てては又訂正していくけれども、永久に断片の薄明かりの中を彷徨わざるを得ない者になる。境界に直面しての「極度の精神集中」も徒労に終わる過程の中で彷徨っているだけだ。この探偵と主人公の二役を続けること、永遠の断片の組合せの謎解きの過程の中に呪われた者として子供や若者は放置されている。

H. 徒労の時代の創造とは？

この境界が不分明の時代には出発点や到達点を支える物語が不明のため、行動が徒労に終わるように見える。始めたときは力に満ちた無垢の者でも、行動の終点に来たときには自分がいったい何をやって来たのか分からなくなる。無意味な仕事の連続によってすっかり自分をすり減らし、やっと地面に立っておれるぐらいの人間の形をした亡霊のようなものになっている。シシュポスやオイディプスのように。だから子供たちはオイディプスのように犯人の「探求」（問題解決）を二重の言語で始める⁹。かつてオイディプスは、知の

ために「視覚」を尊び、盲目のもつ予言性を嘲笑う人であった（テイレシアスを嘲笑うオイディプス）。しかし追求の結果は彼に盲目と暗黒を強いる。

集団の柱をなす規則・法・制度に沿って行為をやり通すことが無意味感につきまとわれるようになる。それは丁度、老人になり「明日」とか「今後」などという自明の言葉が自分にとって何の意味もなくなることに直面する時のように不条理感に満ちたものである。マスコミによって「耳年増」になった子供たちにとっては、合理性追求そのものが一種の不条理であることはもはや常識化しさえしている。

一体いつ合理性の枠をはみ出したのか、どこから不条理の世界にまよいこんだのかさっぱりわからない。境界がはっきりしないのだ。ましていつ自分が見知らぬ世界を旅する人間に変身したのか分からないのだ。メビウスの輪を盲目的に辿るだけである。変身は暗闇で行われるのだ。

「現実」は徒労感のうちに解体しはじめ、人はこの廢墟を彷徨い、謎と問いの繰り返しの中に埋没する。徒労感のみを結果するような不条理の世界を、我々は或る種の「情報科学的世界観」や「人類学的世界観」などに還元してはなるまい。それらの世界観によると、人間の思考は多次元を自由移動するものであるから、深層へと迫れば、必ずそこには「隠された構造」があるはずであり、それを掴み出せばよいという。しかし不条理感をこのような世界観へ飛躍するスプリング・ボードにしてもよいのであろうか。

出力を一時的に保留し、入力のみ段階で分類、関係づけをするリズム（情報圧縮のリズム）を含む階層をなす認識能力を人間が持つからといって、または人間が「先行経験」の枠組みなどはるかに及ばぬ無意識のリズムに支えられているからといって、不条理感を情報の処理や深層への旅へと還元してしまうことは不可能であろう。

確かに我々は明確さと統一性を渴望する。しかし諸々の差異や境界は不明瞭である。諸シンボルも我々を「現実」に引き止めるほど明確ではない。注視すればするほど物事の文脈は朦朧となる。認識を「操作的認識」に限って安心しようとしても、また「深層」や「存在」の認識に迫ろうとも、我々の認識の根底には絶えず境界を不明確にし、未分化を呼び寄せるリズムがある。統一への渴望はいつも自らによって裏切られる。

このような状況を唯一の与えられたものとして受入れ、自分の存在が何の意味も持たないような世界に全力で結合しようとするとき、技術主義的「治療」や、無意味を一つのカテゴリーに祭り上げて理解の様式を作ろうとする存在論的飛躍は避けられなければなるまい。存在との和解や宇宙に抱き取られているなどの包括的な感情などの説教に赴く事は、境界の不明確な時代を再発見した我々には縁遠いものに思われる。

<注>

- ①Schutz, A. ;On Phenomenology and Social Rerations, Edited by Helmut R. Wagner, 1970, 森川真規雄, 浜田日出夫訳, 紀伊国屋書店, 1980, p. 38
- ②Schutz, A. ;上掲訳書, p. 40
- ③河合隼雄 ; 「子どもの宇宙」, 1987, 岩波新書
- ④Kristeva, J ;Etrangers, 池田和子訳, 1990, 法政大学出版局, p. 9
- ⑤Vernant, J—P. 吉田教彦共著 ; C 「プロメテウスとオイディプス」1978, みすず書房

(1991年10月31日 受理)